



傾聴の大切さ

部長 勝木 茂

初等部生の元気な声があちらこちらから聞こえ、2学期がはじまりました。2学期は本日(8/27)～2学期終業式(12/20)と長い期間になります。じっくりと学習するのもに適している季節です。また、みどり祭、学習発表会など魅力的な学校行事も準備されています。

これまで同様、2学期においても、互いを思いやり、自分もみんなも気持ちよく学校生活を送り、初等部生全員が心も体も大きく成長してくれることを願っています。

さて、「傾聴」という言葉があります。広辞苑には「傾聴」とは、耳を傾けてきくこと・熱心にきくこととあります。少し調べてみると、「傾聴」の基本は字の如く、「耳と目と心できく」ことであり、ただ単に「こちらの聞きたいこと」を「聞く」のではなく、「相手の言いたいこと、伝えたいこと願っていること」を共感的態度で「聴く」ことだそうです。カウンセリングにおけるコミュニケーション技能にも「傾聴」はあり、その目的は相手を理解することにあるということです。つまり「傾聴」は相手を心から分かることであると言えます。「傾聴」におけるポイントは①「言葉以外の行動にも十分注意を向け理解すること(姿勢、しぐさ、表情、声の調子など)。②メッセージに最後まで耳を傾けること。③言葉の背後にある感情を受け止め、共感を示すこと。だそうです。

わたしは、子育てや小学校教育において「傾聴」は大変重要だと感じています。子どもたちの間におきる様々なトラブルのうち、互いの感情や意思の伝え合いが十分にできていないことが原因となっていることも少なくありません。もちろん低・中学年をはじめとする小学生のコミュニケーション能力(一般的に感情、意思、情報などを受け取ったり伝え合ったりする能力)は、大人に比べ十分ではありません。赤ちゃんの時は「泣く」「笑う」ということが唯一のコミュニケーション手段です。その後、少しずつ様々な体験を通して言葉を獲得していきます。

子どもたちと話していると、個人差はあり

ますが、自分が実際に遊んだゲームの名前や遊びに行った遊園地など具体的な名詞はよく出てきますが、自分の感情や意思を伝える言葉は、それほど多くはないように感じます。本来は、かなり違うような意味合いのことも、「うれしかった」「いやだった」「楽しかった」「悲しかった」「よかった」「好き」「きらい」などの言葉に集約されてしまうことがあります。時には、「別に」「普通」としか表現しない子もいます。(この場合は、ちょっと意味合いが違いますが・・・)また、どう表現したらよいかかわからず、泣いたり、すねたり、怒ったりという感情表現になってしまうこともあります。時には、物や相手に対して粗暴な行動をとったり、投げやりな行動をとる子どももいます。

しかし、ほとんどのそのような場合にも、何かしらの理由があります。親や教師は、その子が、何を考えているのか、何が言いたいのか、どのような気持ちなのかを注意深く、くみ取ってあげることが大切です。つまり「傾聴」が必要ということです。多くの子どもは、言葉ではうまく表現できなくとも、いろいろなことを考えています。また、親や教師など大人のちょっとした表情の変化でも敏感に感じています。自分の気持ちがうまく理解されないとき、気持ちが悪くなるなど、身体的な症状を訴えることさえあります。

大切なことは、その子の言いたいことを、勝手に決めつけず「考えているのはこういうことなの?」「言いたいことはこんなことなの?」と、その子に、愛情をもって想像力豊かに声をかけ、言いたいことの意味を引き出してあげることです。そのためには、たとえ忙しくても「傾聴」が必要な時があります。また、その瞬間を逃さないことも大切だと思います。

子どもは「傾聴」してもらっている時、つまりコミュニケーションがうまくいっているとき、ストレスが少なく心が安定していることが多いように感じます。

子育てと教育に共通するのは、やはり愛情ではないかと思います。